

本年 9 月彼岸明けに、私共が寺として支援をしているネパールの生徒たちに逢って来ました。以前よりサンジブ理事長から現地視察訪問の打診を受けておりましたが、なかなか叶わず今般漸くの運びとなりました。交流倶楽部のツアーの日程とは都合がつかず、一人のみの訪問となり、また寺の行持の都合もあり二泊三日の強行軍で、理事長をはじめスタッフの皆様には面倒をお掛けし恐縮しております。結果的には、悪天候による道路状況で村には入れず、支援している生徒 6 人のうち 3 人に面会しましたが、理事長曰く「精一杯いい格好をして支援者に会いに来ている」と云う事もあり、生活状況を生で確認することは出来ませんでしたし、意思の疎通も儘成りませんでした。彼らの仕草や表情から、支援への感謝や未来への希望は充分くみ取れた気がします。私共は「気の毒であるから。かわいそうであるから。」と云う理由でネパールに支援しているのではありません。子供たちの表情を比べれば、我が国の子供たちのほうが余程気の毒かもしれません。屈託なく遊んでいるネパールの子供を見れば、「騒がしいから、保育園や公園を作るな。運動会は音楽なしでやれ。」と言う訴訟があったり、学校での虐めや親から虐待が日常の問題になったりしている日本の子供のほうが可哀そうな気がします。それを放っておいて良い訳は無いのですが、私たちの力には限りがあります。

私共の寺としては、鎮守神社の復興・小学生の通学合宿・オヤジの会の拠点化など通じて、地域の子供の成長を御手伝いしております。その広がりにおいて、親日・佛教という関わりの中でネパールの子供の支援を考えております。現在、海外に行ける日本の子供たちが、「従軍慰安婦や南京虐殺」などの謂れのない捏造の過去で虐められる事案があると聞きます。そのような時、ネパールの子供たちが「手を差し伸べてくれる、友人」に、やがて育て貰うため、その心に「友人としての日本人」のタネを蒔くための支援を、私共の寺ではしているつもりです。「おカネを出すから友達に成ってくれ。」という事ではありません。支援を通じて日本を知り、日本の真実に気づいて貰えれば、政治的な「過去の捏造」など直ぐに濡れ衣と判るはずで。

「情けは人の為ならず」と云う諺がありますが、「対等な友人として手を貸す」ことを目的とし「有限の資金から最大の効果を引き出す」為には基金の教育支援が最適であることが今回の視察で確認できました。

サンジブ理事長も此処の必要性から、万端の準備をしてくれたものと存じます。

「百聞は一見に如かず」とは謂いますが、もともと事業に微塵も疑いは無かったので、「しんどかったなあ」という思いは正直なところ否定できません。しかし、確認できた以上「今後も寺檀一致して、出来る限り手伝おう」と云う決心は固まりました。